

あいまいな都市 梶井基次郎の作品における自己と他者

スティーヴン・ドッド (Stephen Dodd)

ロンドン大学東洋アフリカ学院日本・韓国言語文化研究室

谷崎潤一郎などの小説家は、波乱万丈で変化に富んだ、そしてなによりも「長い」人生を送りました。そのため、単に彼らの人生における様々な出来事を辿るだけでも、それはとても魅力的な作業になります。しかし、梶井基次郎にはこれはあてはまりません。彼は、1901年に生まれ、わずか20あまりの短編小説を残してこの世を去りました。こんにち、国内外で最もよく知られている作品は1925年に書かれた『檸檬』です。知られているのはせいぜい『檸檬』くらいだと言えるかもしれません。梶井の略歴を簡単に述べてみましょう。大阪で育った梶井の最初の夢はエンジニアになることでした。同級生の影響により音楽と芸術に興味を持ち始めたのは、京都三高に入学してからのことです。そして最終的には小説を書くようになったのでした。1924年、東京大学に進学し、翌年、梶井自身が同級生と共に主宰していた同人雑誌『青空』に『檸檬』を発表します。しかし、ちょうど小説家としての才能を磨き始めたときに、結核が悪化してしまいました。1926年には東京を離れることを余儀なくされ、伊豆半島の湯ヶ島温泉に16ヶ月滞在して、回復を待ちます。しかしその甲斐もなく、東京に戻ってすぐに病状はさらに悪化し1928年には大阪に帰郷することとなり、そこで家族に見守られながら生涯を閉じたのでした。

梶井の時代には、短編小説が盛んだったということは否定できないにしても、魅力的な叙述体のプロットと、美しい詩的散文体との両面において、彼の短編小説は群を抜いています。大正後期から昭和初期にかけて変わりつつあった自己と他者の境界線を定義する　この難しい問題に、梶井基次郎はどのように取り組んだか。今日の発表では、この点について、特に都市空間の表現方法の視点から、考えてみたいと思います。今日は時間の都合で、もっとも有名な小説である『檸檬』にしぼってお話します。

はじめに、日本文学史のコンテキストの中では梶井基次郎はどこに位置するかということを考えて見たいと思います。彼の著作活動は、1923年、関東大震災のころに始まり、ちょうど日本政府が左翼的な政治発言を厳しく取り締まり始めた1930年代初頭に終わっています。これは、日本近代文学史の中では、短いけれども非常に重要な時期です。なぜなら、新感覚派とプロレタリア文学という二つの文学運動が自己と他者の定義をめぐる論争をした時代だからです。両者は、個人とそれより広い社会とのつながりを、どうすれば上手く表現することができるか、さらには、このような自己と他者の関係を表現するために最も適した文学手法は何か、ということについて論争をしました。梶井は、厳密にはどちらのグループにも属していませんでしたが、両者から影響を受けています。梶井は、近代主義的な実験小説とともにデビューした天才的青年作家、川端康成の作品を賞賛しました。事実、彼らは湯ヶ島に滞在中に出会って親交を深めることとなります。しかし他方で、大阪で過ごした晩年の梶井は、より広い読者層に呼びかける手段であったプロレタリア文学の可能性に、ますます魅了されていきました。そしてもうひとつ、当時の小説家と批評家にとって関心の的であったのは、言うまでもなく私小

説です。私小説もやはり、自己と他者の概念の定義と違い、という問題に取り組んだジャンルです。梶井が、その流動的かつ興味深い自己と他者の定義を表現するにあたって、今述べたようなあらゆる運動の影響を受けたのは、ごく当然のことと言えるでしょう。

以下『檸檬』からの引用を使いますので、ここで簡単に小説の筋をご紹介しますと思います。語り手は京都に住む若い学生です。彼は、自分自身に安心感を抱くのは不可能だと考えており、その不安な気持ちは比喩的に「心を始終おさえつけていた、えたいの知れない不吉な魂」という言葉で表現されます。以前のはるかに幸せだった頃を覚えているにもかかわらず、現在の彼は絶えることのない不満を抱いて街をさまよひ、結核に苦しむ現実がさらに状況を悪化させています。しかし、八百屋を通り過ぎたときに買ったレモンがなぜか彼を再び元気づけることとなるのです。彼は、丸善の店の中を歩き回るのが前は好きだったのに、最近ではその場所さえも耐えがなくなっていたのを思い出し、レモンを持って店を訪ねます。そして最後には、美術史のコーナーでカラフルな大判本で美しい城を作ることになります。レモンをポケットから取り出し、その「城」の上に置きます。この学生が書店から出て、京極の方へ歩きながら、レモンが爆弾に変わってその書店をこなごなにしてしまうかもしれないと想像するところで、この小説は終わっています。『檸檬』はかなり奇妙な短編小説です。

しかし、この小説は梶井基次郎の、自己と他者に関する理解、とりわけ都会というコンテキストの中での自己と他者の理解に対する、有効な洞察を与えてくれていると思います。

『檸檬』の語り手である主人公は、様々な異なる記憶を語ることで読者に自分自身をさらけだして行きます。記憶を語るということの効果はふたつあります。ここが第一のポイントです。すなわち、記憶はある時には普遍的自己認識を裏づけ、またある時は逆に、安定したアイデンティティーが完全に失われてしまっている、という印象を生み出すということです。よりわかりやすくご説明するために、小林秀雄の未完の随筆『故郷を失った文学』を引用してみます。明確に定義づけられる「故郷」で育った田舎生まれの人は、東京生まれの人よりも幸運であると、小林は述べています。また、自分自身のような首都出身の人間は、たとえ東京という特定の場所で生まれ育ったとしても、特定の家 - 故郷 - に属しているという感覚に欠けていると言います。これは、都会の風景が常に物理的な変化を遂げ続けることによるものであり、それは小林が言う「確固たる」場所の記憶を持たない東京人を生み出します。そのような場所の記憶なくしては、明確で一貫した自意識を持つのは不可能だ、と彼は嘆いています。『檸檬』の語り手は、東京よりはるかに小さい都市空間である京都に住んでいます。しかし、そこには興味深い類似点があります。彼の広い範囲の記憶が語られることにより、彼が誰なのか、彼はどのように自分自身を理解しているのか、という問いをめぐって、記憶が持つ二面的な性格が明らかになって行きます。たとえば、彼がかつては音楽鑑賞や詩作を楽しみに、友人の家を訪ねていたということが語られます。これは、かつての彼は普通の学生であったということを示しています。子供じみた趣味からは卒業し、音楽や詩作といった文化活動に加わることで、より大人びて洗練された自我を確立していく段階にある、普通の学生だったということ、暗に示しているのです。さらには、同じような趣味を持つ同級生グループの一員として、アイデンティティーを確立しつつあったということをも意味しています。また、この語り手は、子供の頃おはじきや南京玉を口に入れ

てなめることが好きだったことを回想しています。この回想は、何かを舐める口の感触と結びついた幼児の頃の記憶や、幼いころの彼が感じていたごく普通の安心感を、彼に思い起こさせます。言葉を変えれば、このような記憶が、良い意味での自己アイデンティティーの確立を助けているのです。

しかし、これらの記憶は、同時に別の自己理解をも明るみに出します。このような回想は、かつての幸せだった自分はもはや存在しないということ、まざまざと思い知らすものでもあるのです。その事実が今現在の彼が抱く、不幸な精神状態そのものなのです。そうして、自身の体の奥底にある「得体の知れない不吉な魂」を背景にして、彼は記憶をたどるのです。『檸檬』においては、小林秀雄の言う「確固たる」記憶は、「確固たる」魂へと形を変えたのだと、言えるかもしれません。そして、悪意があるかのような変化が、青年の疎外感、すなわち、自分を元の状態に戻してくれるような何かを探して、ひとり街をさまようことへ彼を駆り立てたような疎外感の原因を生み出すのです。こうした意味で、都会の風景は、所属感、つまり何かに属しているという感覚をではなく、アイデンティティーの喪失という感覚を表現するものとなったのです。砕かれ、荒れ果てた自己認識を再生させるために、想像力豊かな小説家がとった唯一の方法は、美しいレモンという感覚的なイメージによって、押しつぶされた魂を変形させることでした。

『檸檬』で描かれているようなタイプの語り手は、大正後期から昭和初期にかけての文学においては、おなじみのキャラクターです。不安を抱え、不安定で、精神衰弱に悩まされ、『檸檬』の場合にはそれに加えて結核に苦しむ若い青年。彼は、平凡な現実と同じぐらいの割合で幻想と想像とに頼ることで、外界との結びつきを保っています。梶井基次郎の自己と他者の理解に

関して言える第二のポイントは、まさにこの不安定性もしくは流動性の要素こそが、日本文学における近代的な自己認識の基本的な要素であるということです。このような不安定さは、部分的にはテクノロジーの変化によるものだと言えるでしょう。歴史上初めて都心を灯した電気の明かりは、不満を抱いた青年が不安に満ちた夜をさまようための場所があるということの意味します。しかし、西洋の教養文学、ドイツ語ではビルドゥングスromanといますが、その歴史に関するフランコ・モレッティの見解を参考にすれば、どのような近代社会においても、このような現象は色々な文化の発達の一部であることが明らかです。青年時代という時代の定義、人の一生の中で単純に年代区分された意味での青年時代の定義が、19世紀のヨーロッパにおいて変化したと、モレッティは述べています。伝統的な社会が失われていくとき、同時に若者の未来の予想可能性、つまり、未来の自分がある程度予想できるという状況も失われます。結果、若者は不安や変化に挑戦したいという衝動、とりわけ旅や冒険に対する関心によって表されるような衝動との結びつきを深めていくのです。内向性や不安定性の問題を抱える若者が多くなったのは、若者自身がなんらかの定義を与えられる必要があったからではなく、西洋が近代に直面した18世紀末に、近代の文化というものが何も存在していなかったからだ、モレッティは考えます。近代が一種の「永久革命」だとすれば、壮年期も老年期ももはや近代を表すことはできないでしょう。その代わり、近代文化そのものを意味づけるために、ヨーロッパでは青年時代というテーマが使われ、若者中心の教養文学というものが、その要望に応えるべく現れたというわけです。

日本文学においても若さが近代を示す中心テーマだとすれば、梶井の作品は間違いなく近代的と言えます。少なくとも、梶井は若くして亡くなりました

たから、不安を抱えた若い語り手たちに対して彼が抱いていた基本的な関心を超えて、さらにその先に進むことはなかったということです。たとえば、梶井が描く語り手たちは、漱石の『こころ』に登場する学生「私」と似通うところは全くありません。非常に深く自己と向き合い、成熟した男性となった今の自分の視点から、その若い日の体験を思い返すといったキャラクターは、梶井の作品にはないのです。教養文学をベースにした作品に限定して言えば、梶井の登場人物は鷗外の『ヰタ・セクスアリス』の語り手とも性格を異にします。『ヰタ・セクスアリス』では、語り手は年代を追って語りを進めることで、抑制しがたい性欲をより理性的な考えへと変形させます。『檸檬』の語り手は、完全な大人へ移行する過程のほんの始まりにあり、モレッティが呼ぶところの「経験の永久革命」の真っ只中にいる学生です。梶井の作品における近代的側面を強調するもうひとつのファクターは、彼の人格の平凡さにあります。梶井は著名な文人の家に生まれたわけではありません。彼は、大衆文化に対する需要が高まりつつあった大正後期の社会にあって、小説家として自分を確立するための教育と才能を兼ね備えた、多くの若者の一人に過ぎません。多くの読者たちは、梶井の体験を彼ら自身の身をもって理解することができたでしょうし、小説が向き合う「自分は何者か」という基本的な質問にシンパシーを覚えたことでしょう。そして、その質問に答えるべく梶井が取った重要な方法は、個人と都市空間との関係を探求することでした。

個人と都市空間の関係を描いた梶井の文章に関しては、後で例を挙げますが、その前に、梶井基次郎の自己アイデンティティーの問題について、三つ目のポイントを述べたいと思います。全体的に不安定性や流動性を表現しているがゆえに、梶井の文学が近代的だと言えるということは前に述べました。

この流動性は同時に次のような意味においても、重要なものです。一つのテクストの中ででも色々な様相を見せる、非常に多様性のある自己を、梶井はときおり表現したという意味においてです。様々な文化的産物の増加により、一般的な概念としての多様性が、大正後期以降の大きな特徴となったということは、すでに多くの批評家が指摘しています。殊に映画は、文学の技法との共通点も見せ始め、新しい表現手段となりました。よく引き合いに出させる例は、映画の静止画像と関係付けられることの多い横光利一の小説『上海』の冒頭シーンです。間違いなく、梶井の多くの小説にも、映画の技法に影響を受けたかもしれないような、光の描写や視覚描写が見られます。

しかし、この意味での多様性はより特殊文学的なものかもしれません。最近私が読んだ本の中で、アメリカの学者セイジ・リピットは、1920年代の日本文学は、アイデンティティーの完全な崩壊によって性格づけられると述べています。言文一致様式が、常識的でかつ分かりやすい形式として多くの人々に受け入れられていった時代、また多くの作家たちが私小説を、独立した自我のアイデンティティーを表現する最良のジャンルだと考えていた時代、まさにその時代に、一部の小説家たちは現実をそのままに表現することの可能性を問い始めたのです。横光ら新感覚派の作家たちは私小説の正当性に対する挑戦の最前線にありました。また、芥川の『ある阿呆の一生』は別の例です。これは、いかなるジャンルも全ての現実を表現することはできないという考えに基づき、様々な種類の文学様式を使った作品です。梶井の文体もまた、散文体と詩文体が混ざっていて、文学様式を明確に区別するのが難しいものです。

しかし梶井の『檸檬』は、多様性の概念、とりわけ自己の多様性の概念を、

文語体の形式によって表現しています。原文からいくつかの例を挙げると分かりやすいかもしれませんが。不幸を抱く語り手は京都の町を歩きながら、自分が長崎や仙台のような遠く離れた街にいるという空想にふけり、そこで心の平安を見つけることを空想します。語り手は、京都とそれらの空想した都市を次のように比較しています。

ねがわくはここがいつの間にかその市になっているのだったら。錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれを想像の絵の具を塗り付けてゆく。何のことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

二人の自分の存在という幻覚は、ドイツ人の言うドッペルゲンガー現象を思い起こさせます。ジークムント・フロイトが、有名な随筆『不気味なもの(原題ウンハイムリッヒェ)』のなかで取り上げた話題です。いろいろな自己のありようが考えられるという状況は、絶対的に固定された核となる自我が、完璧なまでに傷つけられ、その価値を奪われているという状況を暗示している、とフロイトは特筆します。多様な自己が内包する危険性は、その自己を別々に切り離したときに、それぞれが必要でない、あるいはなくてもいい存在に陥る、という点にあります。『不気味なもの』と同年の1919年に書かれた佐藤春夫の『田園の憂鬱』に登場する人々は、ドッペルゲンガーが持つもっとぞっとさせるような一面を表現した日本文学です。この物語の中で、精神的に不安定な主人公は、ある晩、犬の散歩をしている折に、遠くから犬を呼んでいる別の自分の存在に気づきます。このストーリーの不気味さは、犬までもがどの方向に走ったらいいのか混乱しているように見えるために、これが現実なのか、あるいは語り手の幻想なのかがわからなくなるという不明

確性にあります。梶井の『檸檬』の場合は、二重の自己ゆえに、滑稽なまでの自己逃避の機会を得ることができます。が、しかし作品に潜む暗い影によって、ドッペルゲンガー現象が持つこのいっそう不気味な面を無視することはできないでしょう。

時間がないので、急いで梶井の自己と他者の理解についての最後のポイントに移ります。いかにして人間の主観性が外界の環境、とりわけ都会の環境との接触をはかるか。多くの近代文学はこの質問に向けられています。梶井の作品もこうした問題を反映しています。そこで、私が指摘したい最後のポイントは次のとおりです。内面に秘められた自己と外界で起こる事象との境界線は明確だとはとても言えないのではないか、そういう可能性を梶井は見出そうとしていた、ということです。精神と物理的な現実との間、概念と具体性との間の、透過性のある境界線、つまり曖昧な境界線は、『檸檬』の語り手が不安な夜を歩き回るうち、八百屋の前で立ち止まるシーンで、美しく表現されています。つりあいの取れた様々な色の中で、この果物は語り手に力を与え、そしてそれは音楽に例えられて雄弁に語られます。この果物は黒い漆塗りの板に並べられ、次のように描写されています。

何か華やかな美しい音楽のアレグロの流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面 的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリュームに凝り固まったという風に果物は並んでいる。

この部分は、難解でありながらなんとかして美しい言葉を使うことで得られた、梶井自身の喜びを反映しています。この文章は日本語のネイティブにとってもやっぱり分かりにくいのではないのでしょうか？ともかく、不安を抱

くこの若者は、もはや友人の家に集って本物の音楽を聴くことはできないでしょう。しかし彼は、日々の現実体験を変形させるために、感覚的な比喻として音楽を使うことを止めはしなかったのです。言葉を変えれば、語り手の想像力に外界の要素を変形させるだけの力がある、ということをこのシーンは物語っています。

また他の箇所では逆に、外界の要素が語り手の内なる意識を変形させる効果を持つことがわかります。それは、暗闇の中で明るく照らし出された八百屋が持つ圧倒的な力を語り手が描写するところに、分かりやすく現れています。

そう周囲が真っ暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟雨のように浴びせかける絢爛は、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままにも美しい眺めが照らし出されているのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ差し込んでくる往来に立って、また近所にあるかぎ屋の二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物店の眺めほど、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中では稀だった。

この場合、物事を変換させる活動的な力、螺旋棒が眼の中に差し込んでくるかのように、見つめている自己に物理的に入り込んでいく、そうしたエネルギーになったのは、明るく照らされたシーンそのものです。美しい音楽が色に凍結したという表現、外側からの刺激が自分の中へ浸透していくありさまは、明らかに、常識を超えた詩的ロジックによるものです。しかし、ここで重要なのは、自己と他者の明確な境界線を破るということの効果です。梶井の作品はありとあらゆる方法で、当時の文学が見た変化、すなわち独立した

「外界」現実の輪郭を形作ったり変形したりする力を想像力という内面に与える、という新しい境地を表していると言えるでしょう。『檸檬』の場合、この事実が、近代的でテクノロジーの発達した都市空間の媒体として働いているということは、疑いの余地がないと私は考えます。

(編集委員会注)

本論文中の「自己と他者」は self and other の和訳である。執筆者ドッド氏の言によれば、「他者」という単語は「外部世界」と読み替えることも可能であるという。